

清華学校における学生演劇

——洪深の『貧民惨劇』を中心に——

鈴木直子

はじめに

民国期に入ると上海では新劇活動が盛んになるが、一方伝統劇の勢力の強かった北方においては、新劇は商業的には成立せず、学校演劇の中で成長を遂げていく。伝統劇の改良から始まり新劇活動を開始したのはまず天津であり、やがて五四運動の影響を受けた学生たちを中心に北京の各学校で新劇団が形成されていく。

筆者はこれまでに北方での演劇活動がどう形成されていったのかを考察すべく、天津での汪笑儂と戯劇改良社に着目した論文⁽¹⁾や、天津南開学校の新劇団や北京大学新劇団に関する論文⁽²⁾をまとめたが、北京において北京大学新劇団よりも早い時期から演劇活動を行っていたのが本論で取り上げる清華学校である。

1911年に義和団事件の賠償金によって創設された清華学校（最初は清華学堂、1912年より清華学校となる）では創立以来、学生による演劇活動が盛んであった。清華学校の演劇活動は1913年から行われ、1919年に新劇団が起こった北京大学よりも数年早い。英語を学ぶという学校の性質上、英語劇の上演以外に、それに倣った新劇の創作も試みられてきた。学校を挙げての演劇コンクールを開催するなど、規模も回数も多く盛んであった。

そして、清華学校の新劇を担っていた初期の中心人物が洪深である。清華学校の演劇活動は彼のような後の演劇界、映画界を背負う人物を輩出しており、創作面でも人材面でも、中国話劇の創出に貢献したと言えるだろう。

本論ではこの清華学校における新劇活動の沿革を整理し、中心人物となった洪深に着目し、その初期の作品『貧民惨劇』の分析を通して、同時期の文明戯作品、他校の新劇作品との違いを検証したい。

1. 清華学校での演劇活動

清華学校の演劇に関しては以下の先行研究がある。黄延復の『二三十年代清

華校園文化』⁽³⁾と張玲霞の「論早期清華的文芸社團及其刊行物」⁽⁴⁾であるが、黄の著作は清華学校史の中で演劇活動について述べたものであり、張論文は清華学校の文芸団体について調査し整理したものである。本節ではこの二論文を基に、清華学校の演劇活動を概観しておく。

清華学校は創立時から每学期演劇大会を開催し、1921年までの十年間に百以上の劇を上演した。黄論文によれば、清華学校で演劇が盛んとなった理由として、学生が全国各省より集まり、言語面での隔たりが生じたため、演説や演劇が言語訓練、つまり官話の練習の良い手段となったためだという。

1913年から毎年クリスマスに演劇コンクールを開催し、それ以外に大晦日や新年にも演劇の上演を行った。

1916年9月には遊芸社が成立する。この遊芸社は演劇と音楽との二部門を置き、従来の学年を単位とするコンクールを止め、演劇活動を全校の共同事業とし、脚本から上演に至るまでの一切を管理した。羅発組、陸梅僧という二人が演劇・音楽両部の部長となったが、後に林志煌を社長、聞一多を副社長とし、聞一多が編演部の総経理（責任者）に就任する。

1919年2月には呉澤霖の提案により遊芸社は新劇社に改組され演劇創作と上演に専念することになる。新劇社は1919年4月5日、6日両日、第一舞台に於いて『我先死』『巾幗剣』『是忍可』『得其所哉』を上演し好評を博した。1919年から1920年にかけて、『醒谷進歩』『War and Peace』『希望』『難民之景況』『Row Christmas was Saved』といった演目を上演したという。

この新劇社の統括者となったのがやはり聞一多で、新劇社は編演部（編劇と演出）、庶務部（セット、化粧、総務）とに分かれ、編集会制度を実行し、創作や脚本の修訂を討論した。

1921年11月になると、各文芸団体が合併し、清華文学社に統合され、文学社の中に戯劇組が組み込まれた。清華文学社には詩歌、戯劇、小説の三組があったという。文学社の書記が聞一多、幹事を梁実秋が務め、李迪俊、顧毓琇、翟桓等が発起人であった。このうちの李が戯劇組の中心となり、毎年一度中国劇を上演し、年末に実施すること、また開校記念日には西洋劇を上演することを決め、校内の一切の戯劇事業は必ず戯劇委員会の承認を得なければならなかった。新劇社が文学を中心に活動する文学社の中に戯劇組として設置されてからは、実際の上演活動は相当減少し、活動の重点は戯劇理論の探究方面へと置かれることとなった。

1922年春には戯劇社が独立して成立する。この時は社員70名以上にものぼ

り、幹事に前述の翟桓、書記は聞一多であった。

以上清華学校の演劇活動の沿革を見てきたが、初期の段階で演劇活動を活発に行っていたのが洪深（在学期間：1912—1916）である。次節では洪深について整理しておく。

2. 『吳宓日記』に見る洪深の演劇活動

洪深（1894—1955）は中国話劇において先駆者ともいえる劇作家、演出家である。江蘇省常州出身で上海育ちだが、官僚である父が直隸に赴任することとなったため1908年に上海から天津に移転し天津府学堂に入学した。上海や天津時期に汪笑儂の改良新劇や文明戯に触れ、1909年に成立した南開学校の新劇団の噂も耳にしていたという⁽⁵⁾。1912年に清華学校に進学。同校在学中に劇作、上演を手掛け、『怪盗ロビンフッド』（1914年）、『梨売人（梨を売る人）』（1915年）、『貧民惨劇』（1916年）などの劇を創作した。このうち『貧民惨劇』については、第三節で詳しく述べたい。

洪深の清華学校時代に関しては、『洪深研究専集』⁽⁶⁾や「洪深学生時代的戲劇活動」⁽⁷⁾に詳しく、また清華の同級生吳宓の日記にも清華学校での演劇の様子が度々登場する⁽⁸⁾。

『吳宓日記』（以下『日記』と略）から清華学校の演劇の様子を伝える部分を紹介する。

1914年3月21日（土曜日）の日記には、クラスメイトの演劇の様子が書かれている。

晩、食堂にてクラスメイトの演劇を観る。中国の旧風俗を演じたもので、慶寿（誕生祝い）、入塾、赴考（科挙に赴く）、結婚の4つの話だ。中間の情事が非常に良い、各役者もみな良く、諧謔を弄することといたら絶妙である。その服飾の華美、衣装や道具の精巧さは、思うに上海漢口の新劇団でも及ぶまい。しかも学生の知識も高いため、世の新劇家の口上や動作よりも勝っており、消費に耐えるものである。この劇は元々アメリカ学生訪問団のために準備したものだが、彼等が来られなくなり、遂に今晚上演の運びとなった。⁽⁹⁾

晩、在食堂观同学演剧、所演为中国旧日风俗、为庆寿、入塾、赴考、结婚四大段。中间情事甚佳、各种角色皆称、诙谐笑骂无不入妙。至其装饰之华美、衣物之精工、吾以为此之沪汉之新剧园、有过之无不及。而学生知识较高、故比世中新剧家口吻形貌更高出一筹、耐人消遣。此剧原备为美国

学生游历团而设，后此团不来，遂于今晚演之。

この日の劇は「八時に始まり、十二時に終わる」とあるから、4時間にも及ぶ大作である。清華学校の演劇は主に授業の無い週末（特に土曜日）に行われていたようだ。「クラスメイトの演劇」というから、恐らく洪深もこの中に含まれていたのではないだろうか。

また洪深の『怪盗ロビンフッド』（1914年）については、「洪深小伝」⁽¹⁰⁾によれば、「劇のストーリーは山深い森林で発生するため、彼は大胆にも校内の丘林の密集する場所を劇場とし、山林溪流の風景を借りたため、情景は真に迫り演出効果も非常に良かった」という。『日記』にもその詳細があり、初めは1914年6月6日（土曜日）に上演したが、雨が降り出し中止となり、6月8日（月曜日）に再演したという⁽¹¹⁾。場所は蓮花池のほとりで、開演時間は夜8時であり、8日の再演を呉宓は「極めて良い」と述べている。

他に洪深の演劇に関して『日記』では『五倫図』（1915年1月16日上演）を「意思尚佳（まあ面白い）」と評価している⁽¹²⁾。

3. 『貧民惨劇』（1916年）

洪深の清華時期の演劇では『梨売人（梨を売る人）』（1915年）がその年の冬に戯劇コンクールで一等を獲得している⁽¹³⁾。翌年の1916年2月に洪深が書いた『貧民惨劇』⁽¹⁴⁾は当時の上演の記録があり、脚本自体も『洪深文集』に収録されている。

『貧民惨劇』の主人公王一声は裕福な家庭に生まれながら両親を亡くし、学業にも仕事にもつかずに生きてきたため、貧しい生活を送っている。周囲の悪者にそそのかされ、賭博に明け暮れ、借金もかさむ一方。遂には悪者たちの入れ知恵で、自分の妻と子売る羽目に陥る。子は幸い善人が引き取るようになるが、妻は妾として売られた後に命を絶った。妻子を売って得た金も賭博で騙し取られ、叔母を殴った罪から十年の苦役を強いられる。他の登場人物も車夫や物乞い、遊民などであり、貧民の悲惨な暮らしを訴える作品である。

この作品の上演は『大公報』（天津版）によれば1916年2月26日及び3月4日の二晩であった⁽¹⁵⁾。以下は「清華学生之新劇」という記事である。

北京清華学校学生は近く同校の左側に貧民小学を増設するが、経費不足により特別に新劇を創作しチケット代をこれに充てる。すべての舞台セットや衣装には美術画装を用いる。今月二十六日及び三月四日両晩北京東城青年会を借りて上演。入場券は北京青年会が代理販売。一枚一元。

北京清华学校学生近似于该校左近增设贫民小学一所以经费不敷特编演新剧售票集款一切布景扮脚均用美术画装限定于本月二十六日及三月四日两晚假坐北京东城区青年会开演入坐券即由北京青年会代售每张取值一元。

『貧民惨劇』の上演は好評で、多くの名士たちが観劇に訪れ、たくさんの募金を集めた。この劇は上演の際に「芝居が上手だが容姿はそれほど美しくはない男子学生朱君に主人公王一声の妻を演じさせた」⁽¹⁶⁾ そうだが、洪深は外見ではなく演技力で配役をしていたこと、また女子学生が当時は不在なので男子学生が女役を演じたことが分かる。

題材方面でも「貧民の生活状況を空想や誇張を交えず、できる限り写実的に描いた」⁽¹⁷⁾ と評価される作品だが、文明戯や南開新劇団との一番の違いは台詞であろう。台詞は登場人物の対話で進められていくのだが、一人の台詞がほとんど一行であり、長くても三行程度、しかも句が短くテンポが良い。全く口語スタイルの演劇である。文明戯の作品が文語調を交え、長台詞や説明口調である点とは明らかに異なり、洪深の『貧民惨劇』の台詞は状況や登場人物の性格を伝えながらも、説明調にはならず、非常に明確で簡潔なのである。

劇の構成は全五幕で、次のようになっている。

第一幕 街市（廟門）、第二幕 引（街市）・求告、第三幕 引（街市）・妻子、第四幕 引（街市）・焼香、第五幕 引（街市）・廟門

第二幕、三幕、四幕、五幕の最初の場に「引」を設定し、場所は「街市」（街）の一箇所に固定される。この「引」というのはプロローグに相当するものであり、この場を設定することで、各幕の状況説明を行い、次の場への橋渡しとなっている。「引」の場があることで、文明戯では台詞中において処理していた説明部分を、『貧民惨劇』では場として演じることで視覚的に観客が状況判断できるのであり、次の場に自然に展開していけるのである。

場面構成以外に注目すべきなのは、「自注」とする部分である。文明戯では旧劇で使用されるような「介」（しぐさ）や「頓足」（地団駄を踏む）という動作指示が多い。泣く時や笑う時には「哭介」「笑介」という指示をするが、洪深の『貧民惨劇』では喜怒哀楽つまり感情と「介」とを分けている。喜怒哀楽や表情、声のトーンに関しては台詞の前に「(哭)」「(笑)」「(憤)」「(低)」と指示され、「介」にあたる部分は台詞の後に括弧で表される。例えば第三幕で売られた妻を張三が連れて行こうとする場面、王の妻が結婚証明書を燃やそうとするのだが、張三の「よし！俺が代わりに燃やしてやる。」という台詞の直後に「(焼介)（燃やす）」というように使われる。

また『貧民惨劇』では台詞の前後に括弧内で表される動作指示とは別に「自注」を付けている。最初の、開幕時の「自注」を見てみよう。

使用人が人力車に乗っており、こじきが追い、走る。使用人は構わず、走る。哀願。

[自注] 人力車で開幕するのは、一つには観客に注目させるため、二つには全劇の雰囲気をつかひ上げさせるため、所謂Atmosphereである。⁽¹⁸⁾

仆人乗人力車、上、吃虧跟跑、仆人不理、跑。哀告。

[自注] 以人力车开场、一則令观者即时注目、二則烘托全剧、所谓Atmosphere。

「自注」前の指示も簡潔であり、「自注」では開幕や劇全体の構成を示唆している。

他にもタバコや銃など舞台指示や道具に関するものや、登場人物の性格、話し方や感情を描写するもの、台詞の伏線（「伏筆」という言葉で表される）を時に英語を交えながら指示している。洪深の『貧民惨劇』という作品が従来の伝統劇のスタイルとは異なり、動作と感情とを明確に分けていること、また「自注」には舞台演出の意図を表明していることから、洪深はすでに清華学校の時期から演出家としての編劇手法を持っていたといえるだろう。

終わりに

以上、清華学校での演劇活動の概略と、洪深の『貧民惨劇』を例にみてきた。『貧民惨劇』から、当時の日本の新派劇の影響を受けた文明戯作品（実際日本の作品の翻案劇が多い）や、天津の南開学校の新劇では、作品の内容や動作指示、ト書きにまだ旧劇の名残があるのだが、洪深の作品にはそれらがあまり見られず、逆に西洋劇の翻案ではないかと思えるほど展開がスムーズである。また編劇には演出家としての萌芽が見られるが、清華学校の演劇は欧米留学生を養成するという学校の性質上、英語劇や西洋劇を模範として始まったのであり、洪深は西洋劇の編劇方法を踏襲しているといえる。

本稿では清華学校時代の演劇活動と洪深の『貧民惨劇』にのみ言及したが、洪深以外に聞一多も清華学校の演劇活動を担った一人として挙げられる。聞一多と清華演劇について、また、彼等の清華卒業後のアメリカ留学時代の演劇活動について（特に洪深はハーバード大学で演劇を専攻した最初の中国人留学生となった）は別稿で論じたい。

注

- (1) 『汪笑儂と天津戯劇改良社——民国初期の通俗教育の一環としての戯曲改良』
（『人間文化創成科学論叢』第11巻 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学論叢
編集委員会 2009年3月）
- (2) 『五四時期の学生演劇——天津南開新劇団と北京大学新劇団——』（『お茶の水女子
大学中国文学会報』第27号 2008年4月）
- (3) 広西師範大学出版社 2000年。
- (4) 『新文学史料』2000年第4期。
- (5) 「洪深與天津芸苑」殷子純（『天津師範大學報』1998年第6期 pp.66-67）
- (6) 『洪深研究專集』（孫青紋編、浙江文芸出版社 1986年）。
- (7) 黃延復著、『人民戲劇』1981年8期。
- (8) 『吳宓日記1910-1915』（吳宓著、吳學昭整理、三聯書店 1998年、以下『日
記』と略）参照。吳宓（1894-1978）陝西省出身。1910年陝西三原宏道高等學堂
預科卒業。1916年に清華學校を卒業し1917年アメリカ留學。ヴァージニア大學に
入るが、1918年にハーバード大學比較文學科に転學。1920年に學士、1921年に修
士号を取得。1921年に帰國し南京東南大學西洋文學科教授となる。
- (9) 『日記』p.318。
- (10) 『洪深研究專集』（以下『專集』と略）所収「戲劇的人生」参照。p.3。
- (11) 『日記』p.359。
- (12) 『日記』p.389。
- (13) 『專集』に同じ。なお『梨売人』という作品は1933年に出版された単行本『五奎
橋』（現代書局）に収録されているが、筆者未見。あらすじは次の通り。梨売りが
豪紳の家の前を通りかかると、その家の使用人たちが勝手に梨を食べ、代金を払わ
ないばかりか梨売りを殴る。家の主人に訴えると今度は主人の息子が出てきて事の
次第を問うが、息子も梨をただ食ひし、さらには梨売りを役所に連行させ告訴する。
豪紳が出廷して来て、またしても梨をただ食ひし、梨売りを牢獄に押し込めてしま
う。
- (14) 『留美學生季報』第7巻第2期（1920年6月）収録。『洪深文集』第1巻（中国戯
劇出版社 1957年）にも収録されている。
- (15) 『大公報』（1916年2月14日）第2面の「京兆」記事による。
- (16) 『專集』。
- (17) 『專集』参照。
- (18) 『洪深文集』第一巻（中国戯劇出版社 1988年）所収『貧民慘劇』p.5参照。
（早稲田大學演劇博物館）